



里見八犬傳

九輯

四十九



傳
600
287



14
500
287

南總里見八犬傳第九輯卷之四十九

東都 曲亭主人編次



第百七十九回下

題目 前出 東西和睦して 兩國津を闊くとの局末是なり

再説巨田助友齋藤高實下河邊行包原亂人直江壯司兼光水崎賢入
等大阪犬塚大村大川等の諸犬士案内せざるに在奥で乾淨處る坐席は造
る小成氏憲房朝良朝寧自胤等の諸敗將の既ぬ其告あるを以て皆うち聚て
おふ居り。管衛の武士二十名其戸口おどけりける。當下助友高實行
包等の六個の使者の諸犬士相引きて各其主拜謁き面正しくもまき
所行るれ只恙なきを祝し且和議のありを告近き日の迎の士卒をまゐり
へるごのり況諸敗將の孰一人も恥ざるべき心ぶ果敢々々去らぬを憲

八犬傳九輯卷四十九

曲亭主人編次

演 契系

重胤久執合志。里見の慈善と大江が神業の效驗を生じしは是を諷言
似れ。助友の好も聞かぬ。躬て身の暇を生じ行包高實等と俱に皆客の間に
退り。大阪下野大塚信濃是を送りて異日と契。助友等ハ對面の款ひを
演で辭し去ま。去る程外面の咳しと突と内に入る者あり。是則別人を大山
道節帶刀先生忠與と大塚大阪の間坐して。佐と助友に向ひてのま。既に面
善ひていへども。折さけいへども。御意を以て和議成りていへども。約束の日に至らず。城地を
返す。まゐる。勿論之。渡莫千住竹塚の遠く。徳北の莊に落點餘之七
有種の乾又。氷垣残三夏行。自の開發の新田。今ハ有種が所。然と
有種ハ根角谷中ニ諛言。一且没落。これども。扇谷殿敗北の折。有種情
地の便宜を以て忍岡の城を拔き。且徳北の莊を捕復し。一時の恥を雪り。然
る。東西和睦の上。有種ハ説論して忍岡の城ハ形如く返す。まゐる。異

諷のべくもいへど。但徳北の莊と其前後左右。四ヶ村ハ皆有種ハ隨從
せり。有種ハ件ハ五人村ハ有種が自の地。返す。まゐる。庄園ハあり。那
有種ハいま當家の仕へま。其岳丈夏行と俱ハ原是豊嶋の殘黨。其
は。我忠與と空谷是音の憶。たは。這ま。什麼と論。助友。其
點頭て其後。あろ。いひ。いひ。聞。那有種ハ人の許せる武勇の義士。其
所。の。莊園。今更誰か掠奪せん。其。其。寡君。正。聞。え。上。て。子。子。孫。孫。の
至。る。ま。除。地。を。い。ひ。勿。論。之。這。ま。心。安。る。べ。と。誓。言。ふ。が。如。く。答。ふ。折。り。大
江親兵衛も出て来て。這席に入り。高實行包胤介ハ言の長きを
罷ふて。我ハ先旅館に退りて。歸帆の準備をま。け。ま。直江水崎も共
侶ハ告別。身。を。起。其。大塚信濃。速。く。立。て。遙。く。送。り。け。る。當。下。大。江。親
兵衛ハ助友に向ひてのま。言新。い。へ。ども。御家の忠臣河鯉守如の獨子

多。河鯉佐太郎孝嗣の靈狐の真助を諛死の刃を免れし。政木大金
 名を改めて今ハ當家の家臣より其宛枉の罪より一肩谷の西ノ字ノ孝
 嗣みづから安え上て那宛を鮮されば後こそ听るべし。這美を心ほひぬら
 と告む。助友嗟嘆して。現ハ河鯉親子の如きハ忠臣ノ孝子多ク諛者ノ
 為ハ害の甚て親ハ死シ子ハ免れて今より隣國の股肱ハ做まるハ悔て及ぶ
 りまら。這折をのて對面して後の交を結ばま欲き這誼を饒しぬむやと
 のハ親兵衛歎びて情と重紙戸をうち鳴其外面ハ立在る。政木大金孝
 嗣ハ方三四寸多梧桐の小箱を三方托のうち載て开を推す内ハ入り先其
 小箱を大阪の身邊のやと閣程ハ親兵衛則孝嗣を先助友ハ引合ま
 送ハ口宜他事のみく和睦の鉄びを演みける其言訖て大阪下野ハ件ノ三方
 托を曳ト各て却助友ハ告るや。嚮ハ扇ハ谷殿和睦の誓言ハを位前を折贈

のハ寡君既ハ拜受せり。是ハより義成も亦這一種を贈り物を
 まま是ハ東西唇齒の交と結びて相背きん照据り。這美宜く賢侯ハ
 上まののねと演て件ノ三方托ハ載る小箱と遞與ま。助友ハ謹ま養て先
 其小箱を熟覽るハ益ハ十二の文字あり。且有一頁長杉無木吉義成
 封ののりハ助友眉をうち頻り。左ま右ま思ハ惟るハ且一頁ある者
 是ハ頭の字ハ又長杉の木多くと吉ハ長吉の三字ハ是を合まれば其字
 是ハ髻の頭と連續做し時ハ是ハ頭髻ハ然ハ這箱の内多ハ去歲の十二月八日
 夜ハ我君矢口の河邊で敵の伏兵を免れ難て那隊の頭人小水門目ハ
 合らむハ御頭髻を今返さる。あどあどとんと風ハ悟ら且恥てうち
 戴らる其箱を懐ハ楚と夾て却ハ鳳智ハ答るや。仁君折言の御貳御意の
 趣養ハ立歸り寡君ハ渡さる。まどハ鉄びハ城受取ハ定らる。下

一日の程の暇をとりてんと詞急しく別を告て旅館を建てて
ゆくと大阪下野政木大左留のあま共侶の玄関をて送りける。徳而巨田
新六郎助友のいそを旅館還と馳て高實行包胤介等の五個の使者
商量を果て且秋篠廣當熊谷直親のありのの趣を任々と告知せて
歸帆の免をひきうらうら五個の使者と共侶の當晚洲崎の港口各快船
うち乗て其投方を走り合ける。伴當執りて船を備はて必の所
用の克くして這事後のいそを然る其次の日の大阪下野大山道節大村大
学の義成主不見参りて城邊與一の事を命ぜられ且堀内貞注小林高宗登
桐良二等のあまの旨を傳へよと照書一通を渡しひきうらう三犬士等乗りて
退りて馳て伴の士卒といひて水路より新井五十子忍岡の城を投て還り
ける。左右まゝ程の四月二十一日のあまの山内の家老齋藤高實并の兵頭

絶内外助惟定等の士卒一千許を得て鎌倉のへり来て其主山内頭定の館を
受合ひらまゝと又其隊の頭人建柴浦弘望の士卒二百名を得て船を
憲房の迎ひあかりの時堀内雜魚太郎貞澄へ大阪下野の傳達せしめて
其下知をひきうらう隨即齋藤高實の鎌倉の館と邊與一を敢秋毫も犯さ
ざる隊の兵三千餘名を得て先新井まで退く士卒都礼讓の貌あり毫も乱
雜あるのみ存りて齋藤高實の山内の士卒咸敬服して及び難と思ひけり
介程の新井より大村大学へ既の城邊與一の準備より田税戸賀九郎逸時と
屋八郎景能等の商量して降人甲良龜九郎等をもて三浦義同の宅眷の和
議の成りよと告て且城兵の降参あつると三浦四十八御の士民の相從へると召聚
合て則宣示やう若們時の勢を見て苟且我の従ふことども今東西和議成て
當城も亦故の如く三浦殿の返りまゝとされば若們も故の如く亦是城主民

だるべ。各々這意をいよ。言叮寧の説諭の大家空の嘆息と合難る開
 中の甲良龜九郎找も出て其美心いひも。三浦親子の暴雄之當城の還り來。我
 們が敵の降りし憎まて必殺せん願ふ安房へ俱しひねと請ふ又三浦平八御
 る。御士豪民村長們も異口同様の願ふやう己等へ御威勢の怕れて従ふりい
 いのど安房の館の御仁政を慕ひまらる。故にこれこの儘幾も。御領の民を
 まく欲も。這意を饒さる。と勸解る。と大學の余の我叱る。城を
 返して其地を返さ。且其民を奪ふ。和睦の名あり。和睦の實あり。我何ぞ然る変
 詐せんや甲良生も這意を思ひね。一旦我の降りし。三浦殿親子の先度。懲
 罰若們を罪さる。心許る。思ひ。我又在是せん術あり。必怖る。と諭す。
 紙の告文の降人甲良龜九郎并の三浦の民の母の罪を記し。書寫て城の玄關を
 貼し。有悠一程の堀内貞澄へ録倉より退き來。則大村大学の録倉のり

趣を任々と告ぐ。大學則其隊の士卒と三浦四十八御の士民の身の暇を取ら。其
 各其地の返り遣る。皆恋々として去る。忍び。猶云々と請ふ者あり。と大學
 饒さ。且のやう。若們知む。鄙語云。幹木の勝る。松枝あり。今新恩を耳と舊
 地を去ら。後悔ありん。然も所依る者あり。異日稻村へまらる。今番へ俱
 して皆悉出。遣り。有悠一程の水崎。蜆人小磯真砂の残兵二百人を
 將て沼田の城より這里來。大學并の貞澄。逸時。景能等。和睦の歡びを
 演る。當下大学の戦粟。錢財。武具。調度。至る。皆算帳の寫し。自録の
 合して是を蜆人真砂等。の遞與。明白して。犯し掠る者あり。且のやう。甲良龜
 九郎等。城兵の苟且。我の従ひ。城内の三浦殿の宅眷と士卒の妻子等。のあれん
 徳れ。他們的。不忠の罪あり。我其を寫して。玄關の貼し。置。義同義武を
 來。ま。各。這意を傳へ。言。詳。の。教諭。其。蜆人真砂等。飲ひ。養て。取遣ふ

演
 毒
 論

者るるけり。然るに去の日。城内の掃除の届き。所々傲慢不礼の事あり。礼儀
 礼儀。其名虚しく。されば。賢人真砂。從兵。すてのよま。ま。く。敬服。七別。と
 惜ひ意あり。候而。大村。大学。の堀内。貞澄。田。税。逸。時。苦。屋。景。能。等。と。俱。小
 安房。より。従。ひ。來。り。隊。兵。僅。の。三。百。餘。名。を。將。て。新。井。の。城。を。辭。し。去。り。水。路
 安房。へ。還。ら。ま。く。三。浦。四。十。八。御。の。村。長。莊。客。等。へ。猶。別。を。惜。ひ。者。あり。
 其。每。數。百。名。沙。を。踞。揚。て。赴。り。來。り。大。学。が。乘。り。船。の。纜。を。曳。止。り。相。公
 へ。我。們。と。棄。て。安。房。へ。還。り。の。よ。願。ひ。這。地。の。在。城。と。猶。善。政。を。施。し。ま。す。
 凍。餓。死。亡。の。憂。ひ。を。樂。し。く。妻。孥。を。養。ふ。べ。い。そ。と。諸。聲。の。叫。び。を。放。つ。も
 ぬ。され。ば。大。学。是。を。慰。め。て。諭。せ。し。も。只。賁。縁。を。貞。澄。の。又。逆。時。景。能。も。林。亦
 難。く。大。刀。引。拔。き。て。纜。索。と。斫。捨。し。て。順。風。に。任。ま。り。船。工。每。が。本。船。伴。船。十。餘
 艘。觸。拍。子。齊。く。漕。り。と。去。る。を。招。ひ。ら。れ。村。長。莊。客。沙。小。浪。び。品。不。推。り。て。

喚聲のぞ。浦風の吹送られて。遠離り。行船。ま。幽。小。聞。え。ける。然。る。に。去。の。後。里。見。実
 里。見。義。弘。の。時。に。至。り。て。找。て。録。倉。の。乱。入。り。日。の。三。浦。四。十。八。御。と。殺。捕。り。て。
 久。し。里。見。の。所。領。の。做。者。ん。這。時。既。に。那。地。の。民。の。徳。を。慕。へ。る。餘。波。に。義。成。主
 礼。儀。の。植。し。善。根。を。と。り。時。の。識。者。の。論。ひ。け。り。大。は。是。後。の。話。の。程。に。大。阪
 下。野。亂。智。の。五。十。子。の。城。の。く。來。て。城。邊。與。の。事。遺。も。る。新。井。大。塚。及。石。濱。等
 三。个。城。へ。義。成。主。の。下。知。を。傳。へ。て。且。浦。安。牛。助。千。代。丸。圖。書。助。等。を。俱。に。各。士。卒。を。部
 下。の。准。備。を。做。し。程。の。二。十。一。日。の。做。り。に。這。朝。大。阪。亂。智。の。去。歲。の。冬。より
 當。城。の。囚。置。し。大。石。憲。儀。と。細。坂。四。郎。等。を。牽。出。さ。せ。告。る。和。議。の。成。り
 去。り。て。去。て。且。の。我。當。城。の。和。殿。等。を。久。し。屏。居。の。せ。し。河。堀。殿。と。親。姑
 姫。の。お。小。在。る。故。に。和。殿。等。と。共。侶。の。這。城。郭。を。領。守。る。亂。智。が。用。心。あり。
 なる。小。東。西。和。睦。成。り。て。今。日。當。所。と。大。塚。忍。岡。の。城。ま。で。皆。是。角。谷。殿。の。

者るるりり然れ其の日城内の掃除あり届き所を傲慢不礼の事ゆき礼儀
 礼儀其名虚しくされ賢人真砂従兵すまのようまき敬服七別と
 惜ひ意あり憐れ而大村大学堀内貞澄田税逸時苦屋景能等と俱
 安房より従ひ來り隊兵僅の三百餘名と將て新井の城を辭し去り水路
 安房へ還らまき程の三浦四十八御る村長莊客等へ猶別を惜ひ者あり
 其毎數百名沙と踞揚て起り來り大学が乗る船の纜を曳止めて相公
 ろを我々と棄て安房へ還りゆる願ふ這地は在城と猶善政施ゆる
 凍餓死亡の憂ひなき樂し妻孥を養ふべしと諸聲の叫びて故へも
 ゆされ大学是を慰めて諭せども只貴縁をも貞澄も又通時景能も禁
 難く大刀引拔きて纜弗と斫捨し順風任せ船工母が本船伴船十餘
 艘船拍子齊しく漕りて去るを招ひたる村長莊客沙の滾び品も推りて

喚聲の浦風吹送られて遠離り行船も幽小聞えける然れ
 是れ里見義弘の時に至りて找て録倉の乱入り日三浦四十八御を殺捕りて
 久し里見の所領の御者今這時既那地の民の徳を慕へる餘波も義成ま
 礼儀の植善根るべし時の識者論けり是後の話の介程大阪
 下野胤智の五十子の城より來て城邊與の事遺もる新井大塚及石濱等
 三ヶ城へ義成主の下知を傳へて且浦安半助千代丸圖書助等と俱各士卒と部
 下て件の準備をせし程の二十一日の御りて這朝大阪胤智の去歲の冬より
 當城の囚置する大石憲儀と細坂四郎等を牽出させ告る和議の成り
 去りてて且の我當城の和殿等を久し屏居のせん河堀殿と親姑
 姫のおの在る故ありて和殿等と共に這城郭を領守る胤智が用心あり
 たり小東西和睦成りて今日當所大塚忍岡の城までも皆是角谷殿の

僅の二三百

返らまわらざるべし。和殿等、這裏在るも好に在らば面目なるべし。其の故、放免を
去向へ各隨意せし。おのゝ胤智が寸志ありと。大刀兵具と始憲儀、綱阪等、其
乗る馬を牽出させ、皆是を命らせし。憲儀と綱阪四郎等、取て其
飲ひせしめ、阿容々々と退き、且城兵を送られて五十子の城を出し、投て
往方と定めぬ。左も右も面伏され、館定正の迎ひまらんと。河鯉の城へ
いそ程、其路一里有餘あり。大塚の城の兵頭ありけり。友橋雜記、丁田畔
四郎等、大塚の城を受合んと。残兵僅に二三百名を領て、河鯉の城より來
ぬるの逢ひけり。憲儀、是は勢馮き、然らば先我城を受合と。明日河鯉の城參
り。其里より路を引復し、綱阪四郎も己をばせ、憲儀と相俱り。大塚の城へ
いそ程、然らば又去歲の冬より五十子の城の在りける妙真音音曳の單節の
河堀殿と貌姑姫を守護の爲に附らして、那十個の女房等と俱に最正首の

仕る程、東西和睦整ひて、既の城邊與の日の做り、この這朝胤智、河堀殿不見
矢と和睦の事、徒々と城邊與のるま告まらせ、且妙真音音曳の單節の胤
智等、先づ舟を安房戻さんと。心のさき、邊々亦外面退出し、妙真音
音曳の單節、辭去ま、欲する程、河堀殿も貌姑姫も他等、日屬正首の仕へ
けり。好意を感じ、別惜みの事、大なる金銀を以て、鑲する。匣、玳瑁の櫛、銀
みとを、自許し取出て、錢別のを與へ、多と妙真音音曳の單節、推辭て敢
一、固も受む。奴四人の數る、原の賤婦人、せわれども、里見殿の御恩、大江親兵衛
仁が、大母姥雪代四郎與保、渾家と媳婦よと人不知ら、れて東西置、くは、は、ぬ、不
是賜りて、何のせん、畏うは、は、ぬ、是、は、這儘措せ、る、と、異口同様の辭、ふ、の、敢、受、免
意、な、け、し、河堀殿、困、り、果、て、後、方、の、女、房、の、恁、々、と、吟、付、て、唐、織、の、夾、衣、の、蘭
奢、の、黒、ひ、も、え、る、ぬ、を、四、襲、許、出、ま、せ、て、廣、益、の、ち、載、せ、妙、真、音、音、曳、の、四、圍、の、婦、女、子、の

大塚傳

七



四女功
成りて衛を
両夫と人
解く

みづから薦めて宣やう。汝等の鯉直なる東西受らねば術もあけきど時、今四月の
下浣ゆ。今日殊更温暖なる去歳の儘なる小袖、汗小堪むやわらんきん切て
是を受てよと言。叮寧論多し。妙真音音申す。單節の貴人の佳まを小理り
迫て云々と宣まると猶幾番も固辭ん。さきか小只俱小受載きて被きて軀て
退きて各うら被て出て來り。皆席末の居並びて其飲びと稟ゆ。河堀殿の本意あり
と。徐小其方を見えり。多し。他等今あり。夾衣を下し。今までも舊衣を
胡意上の被され。河堀殿訝りて先其所以を問ふ。妙真音音答ふ。合ての
這舊衣の去歳の冬我瀧田の老候の被けさせぬ。恩賜の東西で侍る。今
多し。夾衣の則是時服也。且縞羅やう小侍も。多し。この新賜を那舊
恩小思ひ易んや。あせり。舊衣を今も猶上の被さる。餘聲を拜と本を志す。
愚意小を侍れと解きて。さへ。と。河堀殿の興醒て又いふ。も。多し。妙

真音音申す。單節の共侶小別と告て既小和睦整て。今日城を返さるべし。這
故の奴毎の身の暇を賜りて。船出と安房へ還り侍らん。王椿の八千歳まで恙なく
在さん。と祈り。多し。この程。還らせぬ。真衣を轉て御飲び入
る。と。直まらぬ。今も御別あり。多し。この果て俱小身と起せ。河堀殿
親姫も禁難と云々と詞寡く。芳ひの當下侍坐せ。女房が一兩個あり
ぬ。鈴鐸の間を。送る。有徳一程。小森但二郎高宗木曾三双季元
正五。十餘名。おて大塚の城より來り。大阪下野の告るや。嚮大石憲重の
兵頭及橋雜記。丁田畔四郎と喚。彼も者。殘兵二三百名。おて城を受合ん。と
來り。開が頭人の豫より。放免せらるべし。安え。大石源左衛門憲儀之綱
阪四郎相従。這故の咱も敢饒さ。寤りて且道。源左殿へ當城主大石氏の
嫡子の。去歳より久く擣め。下。刑餘放免の罪人の綱。阪四郎。是の同

みづから薦めて宣やう。汝等の鯁直なる東西受らねば。術もあけ且ど時今四月の
下洗ゆて今日殊更温暖なる去歳の儘なる小袖下汗の堪むららんきん切て
是を受てよと言叮寧論多し妙真音音申る單節の貴人の住まふ理り
追て云々と宣まると猶幾番も固辭んはささか小只俱不受戴きて被て軈て
退きて各々被て出て來り皆席末の居並ひて其飲びと稟ゆる河堀殿の本意あり
と徐々其方を見たりと之に他等今ありと夾衣を下しと今までも舊衣を各
胡意上被され河堀殿訝りて先其所以を問ふ妙真音音答ふ合ていさ
這舊衣の去歳の冬我龍田の老侯の被けまをひさ。恩賜の東西を付か。今
あつらふ夾衣の則是時服也且綺羅やふはむともしりしと這新賜を那舊
恩の思ひ易んやあせりと舊衣を今も猶上被さる餘聲を拜と本を志まぬ
愚意小を付れと解きてさへとさる河堀殿の興醒て又いふもさるりし妙

真音音申る單節の共侶を告て既和睦整て今日城を返さるべし。這
故の奴毎の身の暇を賜りて船出と安房へ還りたりん王椿の八千歳まで恙なく
在さんとを祈りまうたりとの。詰正程まき還らせらる。恩を轉して御飲ひ八入
多んと申すまうたり今も御別ありたりとの。果て俱の身と起せ河堀殿
親姑姫も禁難と云々と詞寡く勞ひある當下侍坐せ女房が一兩個あり
ぬて鈴鐸の間まを送りける有徳一程の小森但二郎高宗木曾三双季元
兵頭及橋雜記丁田畔四郎と喚做者殘兵二三百名をねて城を受合んを
來りけり開か頭人の豫より放免せらるべしと宣えらる大石源左衛門憲儀之綱
阪四郎相従了。這故の咱等敢饒さる。若く且道源左殿の當城主大石氏の
嫡子のまごも去歳より久く擒めせらる。刑餘放免の罪人の綱阪四郎も是の同

祝

這城郭の源左殿不返まゐるを扇谷殿不返一まゐるを何ぞ刑餘の
人の遮與さん和殿兩個は且退きね扇谷殿より遣さるる反橋丁田の城を
遮與て咱等退りて後こそ出入り和殿等の隨意をさ勿論るべけれ目今の
空かごとを城門より内へ饒さね憲儀大く腹を立て好々其差らるる我の館の
御迎の河鯉へこそあへけれと嘆き反橋雜記が將て來る人馬を幾許り分と
せ伴當の多馬の跨りて細阪四郎と共侶の開が儘出てきたら咱等の李元と
相共の雜記畔四郎の城を遮與て且從來の隊の兵との俱てかゝる來つる告
白へ又木曾三友李元も其足らざるを補ふて那里の光景を報る折ら妙真音音
曳の單節の後堂より俱の退き來ての趣を大阪の告知されぬ智智の
合咲て小森生の計ひも妙真音音刀自等の寡慾も皆是忠義の真面
目にて最愉快といひべし城遮與の時分も近づたぬといひ先雜兵とて浦安

牛助友勝を召とせ且のち今日城遮與の事果て我相村へ退る折這四
個の婦女子と同船せ云々後人の議論ゆらん和殿は是始より這勇婦烈女等と
俱ふ大功を成さ一人びり今より同船と稲村へ送りぬ然る後岡猿八と雜兵
二三十名を従せんあつてといひせ友勝の異名も高宗李元妙真音
音曳の單節の和睦の款びを演るごと退りて準備をせ程の亂智又猿八等
其事を吟吟る船の長柴浦の維きもの然る音音等四個の婦女子は大阪以
下の頭人の別を告げの身装と友勝猿八等と俱の雜兵を將て城を出柴浦
より船に乗る時音音の舵を召とせと咱等大茂林の所要の那里へ船を寄せ
又舵工等則ちあるは漕出と程もる船を那浦の歌へ音音の一個の雜兵を
めて海苔七夫婦を召とせといひ汝等咱等相忘れせ去歳の十二月八日の
ぞ咱等の浦の流寓りと命終らんとせ折ら汝等の介抱て身へ恙なく思ひの隨ふ

あつた
ういそ
あつた

敵を謀り功成りて這人々と共侶の目今安房へ還る。咱へ則里見殿の家臣も。
姥雪代四郎が老波音音是之。又這同船三個の婦人。大江親兵衛主の太母
妙真刀自并の裁二個の媳婦。曳の單節と喚做さ者。汝等耳の底に藏て
後の話柄みせ。然れども今も放されぬ。汝等小報ひの做さへ。東西も。先是を取まる
ぞ。御向の河堀殿の賜り。唐織の夾衣と曳の單節が品も。三龍衣合出
與。妙真も又其衣を那賞禄も合ひ。甘ひ。然れども。われ海苔七夫婦。憶
さうけ。那老女の這光景の胆を潰と呆る。半响許夫婦両の件の衣を受け
捧げ。夢うとさう。満面都て。うら笑れて。其飲ひをいさ。さ。音を急推禁
と。咱等へ去向をいそ。暇ある日。稻村の城内へ尋來。よさ。く。との間。又潜出。噴
風の船を林も難る。海苔七。妻共侶。建柴の立盡さ。見送り。海苔七。夫
婦の。這下話。有佳。程。巨田新六郎。助友。小幡木。頭東良の獨子。

小幡木二郎東震と俱。二三千の士卒と將て。五十子の城。來ぬ。程。小馬を夏
城外。留。在。せ。助友と東震。有名の老兵。百名許。を從て。徐。城。入。り。大坂
下野。亂。智。内。葉。四。郎。を。是。を。迎。へ。て。小。森。高。宗。木。曾。李。元。千。代。丸
豊。俊。小。水。門。堅。宗。等。と。俱。助。友。東。震。の。對。面。を。送。の。口。誼。言。訖。河。堀。殿。と。貌
姑。姫。の。恙。を。告。る。侍。而。城。邊。與。の。作。法。あり。開。大。村。大。学。が。做。去。事。の。趣。と
異。る。べ。く。も。わ。ら。言。出。て。備。め。せ。當。下。大。阪。下。野。の。城。兵。の。降。參。せ。皆。助。友。の
返。し。と。俱。せ。只。從。來。の。士。卒。三。千。餘。名。を。三。隊。に。分。て。其。二。隊。に。高。宗。李。元。豊。俊
堅。宗。を。頭。人。と。し。三。隊。の。士。卒。を。出。果。て。助。友。が。亦。城。外。に。在。せ。る。人。馬。を。徐。小。幡。木
け。り。出。る。者。も。入。る。者。も。齊。々。整。々。と。混。雜。せ。大。阪。が。准。備。の。船。も。夏。浦。の
わ。せ。り。皆。那。浦。に。赴。け。り。又。日。又。肩。谷。より。忍。岡。の。城。受。合。の。頭。人。白。石。城。公。重。勝
を。入。間。三。三。松。山。三。十。と。副。を。其。隊。の。士。卒。一。千。有。餘。昨。夜。半。より。河。鯉。の。城。を

出で忍岡と投て來ふけり。是より先の大山道節忠與の印東小六明相荒川太郎
 一郎清英と俱の城邊與の準備あり。使と穂北へ遣て落點餘之七有種。和
 睦の一を告知せ他加勢の在陣をさるる五百の雄兵と皆忍岡へ召よせり。登
 時落點有種の家僕小才二世智衆と御民一百有餘と將て忍岡の城の來ぬ
 けれ道節則明相清英等と共侶の對面と今番和議の成り事顛末を
 穂北并の隣里四ヶ村の有種の所領さるる日巨田助友の旋す趣を
 告知せ和殿の咄等と共侶の稻村へ参り多し里見殿と後指合せ。今より後
 安らぐべしと諭せ有種然し在下素より其意あり。是も東西和睦と和君
 等安房へ還り多し我御黨占と影護とむむん先我宅眷ふより
 安堵させく後を稻村へ参るべしと推辭せ道節理ありと合て猶餘談及
 程の白石重勝等が士卒を將て城受合の來ふければ道節先重勝と入間三三

松山三三と伴當十名許と城に入れて明相清英有種と共侶の重勝等と對面して
 りやう。當城は是より有種が僅一壁の力をとて攻捕りて會秘言の恥と雪や。所然
 ども今和睦の上返一はむらむら異美むらむ。但穂北五ヶ村の有種が自の所領を
 以て這城と易ま欲きまの美いぬる日巨田生我談さる所さるる。一欵甚
 麻と問ふ重勝答ふやう。其美の助友と言上りて寡君定正の證文をいなり。
 とのひつ腕て一通を合出で遞與を道節の受合より關き見て有種自の莊
 園にて扇谷殿の賜ふゆね。這照書の要ふければ忍岡の城郭と交易を免
 者との文言を載られれば後々子孫の爲に藏め措くもよらんと心て腕て有
 種は渡せ有種も亦聞と然而重勝の初對面の口誼と云々と舒るどき既にして受
 授のの果へ道節の明相清英有種等と俱の忍岡の城を辭去れば扇谷の士
 卒入替りて白石重勝入間三三松山三三と俱の是を守れり。一進一退交情甚

人其順るるせりと賢をも。這舉ふ在ても里見の徳を思ひき者みろける然れ這
 時道節が準備の船の兩國河の戻り且附従ひ一兵と毎馬淵場九郎が殘黨を
 武藏相模の野武士每みれば城の留らんを欲せむ里見の民も願ひ一か
 今道節が隊の在る者九千餘名とせざる道節は是等と將て兩國河原の赴く
 程の有種も御人と將て水送のとも俱みゆり侍る折ら登桐山八郎良子石濱の
 城を原胤が遠與て士卒一千許を將て這河原の退き來り道節等と共侶の
 船出とせま欲まれば聞の千葉の老黨原胤が等へ裏の行徳口の敗軍の駭怕れ
 主君并家臣の家眷を將て河鯉脱れ去りふあの日皆衛復して欲びの聲耳城の
 けり然良子道節等對面と且是等のよを生けて準備の船の無きま這
 地の船長五十三太素の吉の扇谷の封内の居ま欲せむ東の岸へ隄らんと俱
 杖を採り下總へおたへ留守する高師等里見の舵工と相資けて衆船を遣

まきも準備の身りるる道節山八郎へ明相清英等と共侶の各士卒を令
 乗る其船一百許るべ有種其乘果るま御人と共侶の河原の一霎時
 目送り日暮で穂北へ還りける話分兩頭這朝稻村の城内の諸敗將の留
 別の御食饌の中酒の時及て義成義通出て懇勸の詞と盡さる左右さる
 程の諸敗將を迎の船も洲崎の浦來みけり第一番の憲房を迎とて山内の
 家臣建柴浦久弘望老兵十名雜兵二百餘名第二朝良朝寧を迎平七
 萬戸月十字七宿尻城戸久及大石憲重が兵頭菅菰三布七関口小田八等
 是の從士卒二百餘名這四個の頭人の去歲の十二月本所の敗軍の各深瘡堪
 難て一旦休まゆり辛く命を免れて河鯉へ來て將息と其瘡稍瘥し
 上を見えらる三三三三十一人間九郎松山五六の子弟ゆりける間話休題第三番
 自胤と迎の士卒一百五六十名原胤久這里はる胤が等へ參らま三三

四番の為景と迎の頭人宇佐美三郎職政梶原后平二景澄士卒三百餘名
五番の義同義武と迎の頭人小磯真砂士卒二百餘名
迎の頭人妻有復六萩野井三郎士卒二百餘名
望一郎科草七郎士卒五十餘名
我の路遠けし那里の士卒いさゝか來着せしるべし
出迎へて其頭人等と士卒各三二十名を引て稻村の城の來ぬけり
其亂雜を防ぐとの大塚信濃大江親兵衛大川社大田豊後大飼現八兵衛等奉りて客の間を酒飯の款待り
外次の為の大江神樂の奇效ゆゑ死の刀瘡の愈る飲ひて演る也然憲房朝良以下の敗將齊藤盛實の至るまで迎の士卒を待不煩て他等が御食饌果を馳て各急別を告げて立去らま欲せし義成則諸敗將の良馬各一匹を

大傳九傳卷四十九

文藝堂藏

牽出物とて政木孝嗣満呂里時等とて是と港口で送らま心惟稲戸津衛由充の歸帆とて先衆人を出果と徐小辨去まま時義成其大川莊大田豊後とていさゝか稲戸公翁の這二天士の舊恩ゆゑ他等既に報恩の志と遂うとていさゝか越後の塩の邊に地方に我今より義任悻順の代りて年毎に行徳塩一千石を賜へ必辨ふべしとて由充の額を行と開と思ひげりもいさゝか饒さるひねと推辭せども何ぞ听ん是よりの後年毎に其餽送物ゆゑは任而由充の妻有萩野井等を従て大川大田送ま迎の船ゆゑ乗りて風く三浦へも渡りて陸路を越後へ還りけり只由充の送るも諸敗將の迎の船も皆三浦より出來て俱に三浦へ歸着す蓋安房の洲崎より相模の三浦まで海上僅六里なり其近き由る開の中成氏の迎の伴當又らぬ憲房朝良の下風あり相模へ渡さんとの朽惜けり

大傳九傳卷四十九

十四

文藝堂藏

掉掉

立ち得去る程義成又對面して。是を慰らる。其語次御所成氏
春王安王君の令弟也をいふ。我大父里見季基と然も舊縁なきわらむ
是まざる力戦へ右も左もなされ既も恁親しう交り奉る。舊交を結ばむ欲き
今も御領の郡縣まゝらむ。使に上總多御弓の社と馬の飼料のみを
このまて成氏慙愧の堪む。推禁を合るや。開け辱しむとも我愚みて順逆の理
暗く慈を和殿を伐まさせ。後悔贖を啜るの。其莊園を受んや。我
よも願いた。歸御の憶念箭の如。些の伴當を貸る。當國より上總を歴て陸
路を許我へ還るべし。今的情願は是の。又他事も多。請求むれば。義成安て異
義も尊ら。其美い易。御舊縁もいふ。大塚信濃成孝と。君を送らせ
奉りて。今宵猶又逗留の。明日もあくるべり。且と留むる。成氏へ。安も。忙ら。頭
掉りて。最自由の。いども。今より。徑の。去ま。欲き。諸敗將の。咸返さ。し。我の。猶

淹留其後の外聞も影護る。尚送りの士卒急の整へど。我伴當の。い
い。い。い。と。性急る。需ら。義成。難。ま。御意。任。退。で
大塚信濃の事。恁々と。吟。成。孝。と。其。士卒。と。整。素。も
武備の。家風。あ。れ。一。時。七。士卒。の。支。度。成。り。成。氏。是。の
勢。涌。ま。成。孝。と。芳。以。て。迎。来。る。料。草。七。郎。望。見。一。郎。等。を。急。し。里。見。の。諸
臣。別。を。遣。立。出。る。程。大。塚。信。濃。成。孝。へ。行。装。を。整。て。望。見。一。郎。科
草。七。郎。等。と。俱。内。玄。関。の。俵。在。り。許。我。の。伴。當。五。十。名。里。見。の。士。卒。二。百。名
義。成。主。又。命。て。大。飼。現。八。と。田。稅。力。助。を。其。夜。の。歇。舎。を。送。り。行。は。是
等の。伴。當。二。三。十。名。の。成。氏。既。立。出。る。時。義。通。君。杉。倉。直。元。等。を。從
へ。玄。関。を。是。と。送。り。逆。旅。の。准。備。成。氏。轎。子。に。成。孝。信。道。逸。友
等。各。騎。馬。を。從。ふ。弓。箭。鎗。砲。鎗。棒。柳。箱。を。報。る。者。數。も。佐。藤。稻。村。の

城の後門より拾出ら齊々と上總路を投て俱と行ける然れど這急事也。齋高の義
 成の云々このりける御弓の壯の事成氏の辭ひ隨て其議のこしを是より後里
 見義成の時に至りて許我より足利義明を招き上總の御弓の在るを北條
 氏と力戦の後有ぬあつて時の人義明と御弓の御所を稱ける是其縁故
 べ間話不題却説成氏自他の伴當の俱せしめてより行程の這日ハ三四里
 まで既夕陽の及びく大塚大飼等相計て路傍の寺院を宿とせ現ハカ助
 等へ這里也又成氏を謁と辭去まき時成氏は芳と義成の好意を謝
 らる現ハ其身の伴當を將て逸時と共侶の路をたづ其曉天ハ稻村を歸
 ける然れ又許我より來ぬ成氏を迎の船三四艘ハ頭人下河邊二郎行正間中
 内藏直元と士卒二百餘名うち乗りて二十日の下晡ハ洲崎の浦來着せり這
 頃風さざれば遅参這時及びとのあれども成氏ハ陸地を許我へ入りて里

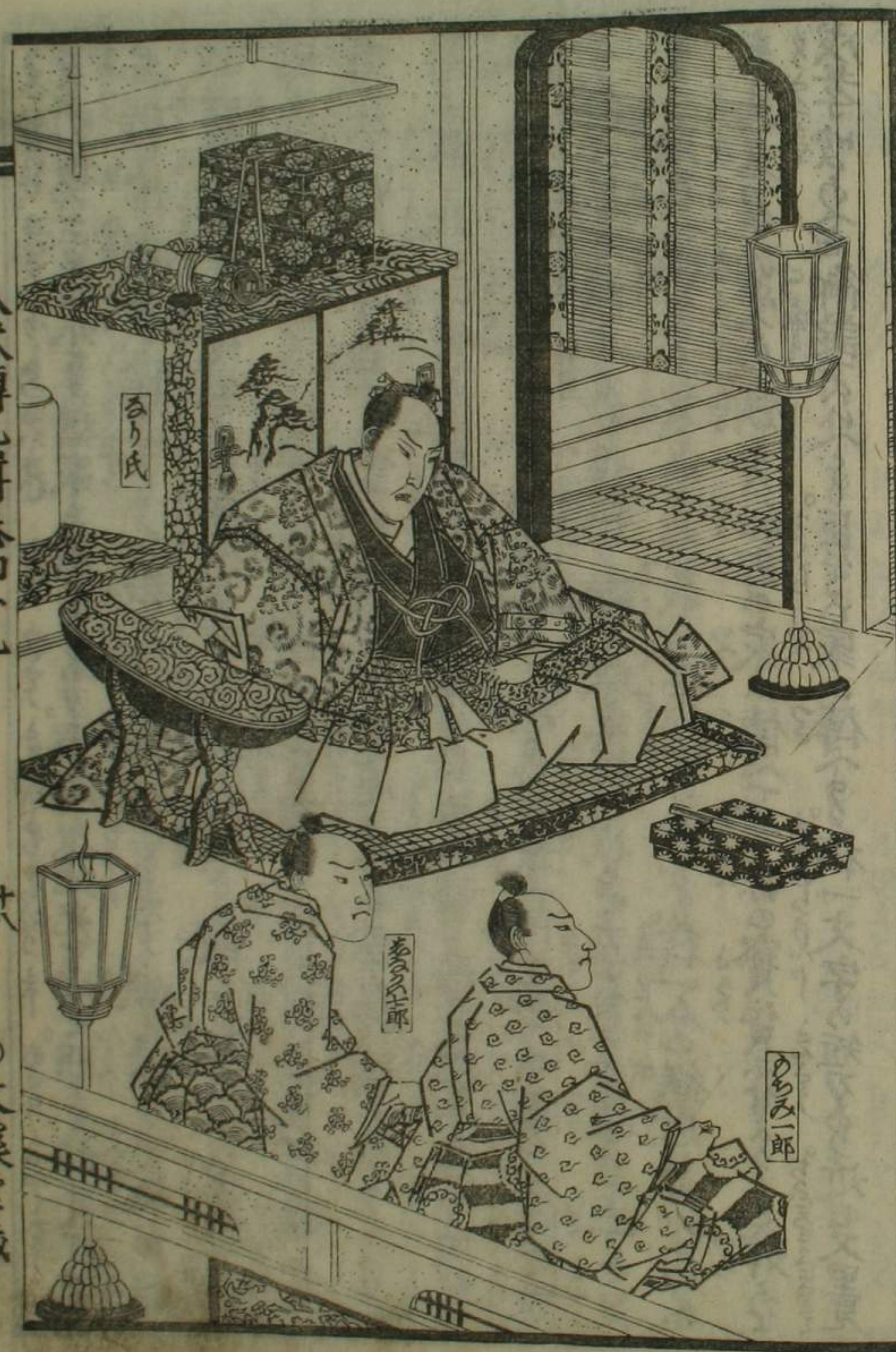
見の士卒を送らして稻村の城を去るひに受せし行正直充駭怖とて介ら
 ぬ起奉るとも及ぶべきを疾船と漕復して甚飾真間の渡りて待奉る候
 とわたりて則津吏人ハ就て來由を稻村の城ハ告訴す次の日徐ハ追風を俟て其
 船各帆を抗て下總を投て走りけり介程成氏ハ大塚信濃を送らして三四日の故
 宿とせ安房より上總路を歷て下總の真間の里來ぬ時既ハ申解及て
 驟雨連りの降沃け大塚信濃計て成氏の轎子を國府吉室の城へ昇入させ則
 ち歇舎をも當城の番士頭人真間井從二郎秋季繼橋綿四郎喬次等ハ
 豫てよのあち得ぬを敢愼を則振照弘教二潤就馬手古内をて是を迎せ
 城の客の間ハ請待き須々利檀五郎二四的奇舎五郎等も這城内ハ在り俱ハ這
 接ハ預りける是より先成氏を迎の頭人下河邊行正真中直元等ハ其船ハ朝見
 河ハ沂り來て國府吉室の城下ハ歇りて在り昨日使とて當城の番士等ハ成氏這

地を過らせぬ。知せぬ。べし。の。せ。く。番。士。等。則。ち。あ。ら。は。し。今。這。告。め。り。行。き。
 直。元。の。士。卒。五。六。十。名。を。ね。て。船。上。り。出。て。城。の。來。り。望。見。一。郎。科。草。七。郎。等。の。對。面。て。
 本。月。二。十。一。日。の。逆。風。を。船。が。ま。な。い。憶。ひ。を。遅。延。さ。ま。さ。り。且。昨。早。小。泉。河。ま。で。
 う。り。來。て。御。歸。路。を。俟。奉。り。し。ま。其。顛。末。を。傳。へ。上。り。成。氏。に。傳。へ。其。身。性。急。で。
 他。等。を。俟。ま。り。行。の。ま。に。取。其。遲。延。を。咎。め。然。し。我。の。翌。朝。開。の。船。を。許。我。還。り。
 べ。其。准。備。等。を。と。り。行。正。直。元。あ。ら。は。し。船。の。士。卒。の。下。知。を。傳。へ。那。身。臺。の。
 城。内。の。在。り。船。を。伴。を。せ。ん。と。然。し。秋。季。高。浪。木。等。入。猛。可。三。百。個。の。歌。客。の。て。
 一。宴。時。混。雜。な。ら。し。素。も。准。備。の。置。く。親。疎。の。歌。を。點。配。し。上。下。の。多。
 饌。朝。餉。の。儲。珠。も。既。に。七。日。の。暮。り。成。氏。の。浴。夕。饌。果。て。臥。房。の。隣。に。編。
 室。の。在。り。望。見。一。郎。科。草。七。郎。の。と。り。最。徒。然。の。見。え。大。塚。信。濃。成。孝。
 參。り。と。四。表。八。表。の。話。説。と。是。を。慰。ま。り。せ。け。折。り。驟。雨。の。降。り。降。ら。ざ。り。

窓を折り夜風の音も平らぬ身は草枕旅さぐら。椎の葉は装る飯も人の情の
 浅くはなれぬ思ひ成氏も今昔のりせいで出で。閑談のよ。蕭然の登時成
 孝の謹で成氏小稟まやう。曩の御安の入奉り。村雨九の一刀のりて君が進む。
 愚父大塚番作の末期の遺訓を果さると思ひのり。稻村の御同居の
 敗将達の憚りぬれ。稟し出る便且も今宵涯りの御別れ。心慌く
 愚意の及ぶ所を。驚き奉る不敬を饒まを。後方小措
 う。刀。櫃。を。曳。き。蓋。を。開。き。合。出。し。件。の。大。刀。を。裏。の。儘。小。膝。推。立。て。
 隻。を。衝。て。稟。ま。や。う。い。へ。も。あ。ら。這。御。大。刀。則。君。の。御。先。考。持。氏。朝。臣。の。御。紀。
 中。春。王。安。王。君。の。御。遺。物。な。れ。い。で。君。小。献。甘。と。教。え。る。亡。父。の。志。を。今。果。ぬ。
 臣。等。が。執。り。何。事。も。是。小。勝。べ。た。遮。莫。先。途。の。失。れ。ば。真。の。村。雨。九。軟。む。ら。り。軟。
 御。面。前。の。試。て。ん。饒。ま。を。と。い。ひ。つ。も。開。き。儘。些。退。き。裏。の。紐。解。き。執。出。し。件。の

八代傳記

十七



十八



天つ孝三

孝王孝を
全ふして
遺訓を果は

刀を引抜、三尺の水夏猶寒き稀世の名刀。燈燭忽地光を増て四下も赫変可き。其柄を信と握持て輪々下とち振る程、怪しい一又尖り、颯と瀆る水氣の露。軟雷欬潑々と這席上、降汰を成氏主僕へ憶む。袖も急小うち拂へ、燈燭反て滅んを折る。又唇上を過る驟雨の音、風之烈き雷霆の破々と鳴。且る四月下旬の闇、夜窓の隙洩る電光走る。雲の行佳ひ、それと見えぬ。彼と此と一時の感應、又もむきれば成氏憶を聲を被て、やよ信濃疑解。先其及を斂り、と詞急迫し、制し成孝、阿と応て準備の帛紗を懷より、撈り出り濡る。又を推杖の、韃斂を膝を打ち、左右のふみ棒、げ卒呈ま。成氏へ左右受む。やよ義士志然、然れども我、一介の微恩もたぬ。其名刀を授へ、願ふ和郎の家傳へて子孫の寶、化貫せよ。と辭ふ。成孝、彼の御誕、臣等、家傳へる。相一文字の短刀、近日又見

殿より賜りたる名刀、自餘の刀劍、欲らむ。這村雨、御家の重寶、他人の貨の、做まべらむ。この故、匠作番作、父子二世の忠心を、臣等、追りて果せる。辭む。且、主客の胸も上天も、齊け、雷の音絶て、檐の溜水猶遺る。殘滴の、ゆえ、當下成氏の感涙、坐の、暗ひま、村雨の大刀を、我番欬ら、戴り、傷小閣て、又成孝、謝る。やよ、信濃よ、和郎の至孝、艱義を思へ、恥し我、非徳を、争何せん。今、這奇貨を、惠れ、旅の、酬ん、東西。其義を、一筆示さん。と、信せ。望見、一郎の逆旅、硯を、執出させ、墨を、搦せ、毫毫、科草七郎、あはれ。指燭を、兼て、照し、程の、成氏へ、坐右。便面を、うち、啓き、管を、握り、の、苦吟を、幾、析、欬、寫着し、を、み、讀見て、含、咲、み、ち、拙、け、は、是、を見よ。と、ひ、つ、臂を、伸し、開き、隨、授る、便面を、成孝へ、遠く、膝を、打ち、受、戴き、却、燈燭の

下の身と身を晴と定を是と見まは正は成氏の自詠の詞也。

まろくの許我の旅人ひる雨のちり来てぬら袖も又其次の心ざりて

そのあつた人のまゝと云ふのでひとちりあつてひる雨の大刀と讀れは成孝屢ち

咎と深く感じ且のちう恐るる當意即妙是とを子孫の傳へて家の宝の仕

らも一唱三歎餘興自禁せむと無礼のへども御返と仕るるもやとり成氏

そ且より人のしつめをく問れて成孝阿と答へて聲朗の詠まろく

今ぞかき身のぬき衣ひひる雨の親の送せし言の葉の露雨三番吟む程の

成氏耳を敬てゆつ憶も膝拍鳴して通愛を實詠達意求むとあつて妙

願ふは是へ寫着てよと請つ刀の裏を食ひて裏よりして差寄きと成孝の敢

せむ其美の許させぬひねと固辭ども何ぞ聴へた望見科草硯を薦む卒と

むろの促せ成孝竟の脱る路も裏の黄光絹へ件の歌を書寫てまろく

ま直成氏へ其黒の乾くとて大刀を囊の斂る程の短夜既の深初て三更の鐘聲

使せり登時大塚成孝の件の便面を推疊懐の楚と夾むと成氏の稟ま既

這年来の志へ仕りぬ人各其君の爲も許我の隣國とて今も後君の爲

寸忠も致まらむ願ふ御身を愛しぬ夜も深ていへ枕に就せぬと

成氏嗟嘆していつ所是の余も明日を別ありふけと望見一郎科草と

郎も共侶の成孝のちら向ひて辭別の詞を盡しけり抑這社校の晨暮大江の神藥

めて死を起され恩美ある今亦大塚が忠孝の志を見安く敬服の思ひ

ぬり。悄地の別を惜むける。憐而次の日天好晴く成氏の辰碑時候の國府書

城と立出て貝奈河の造りて船の無る程下河邊二郎真中大内藏望見科草

首の許我の伴當百十數名大塚信濃も士卒を將て其馬頭上も送りける

休題再説往る二十一日の政木大木全満呂復五郎等諸敗將の還る船を洲崎の

港口の送り果て大川莊々大田豊後等と俱に稻村の城の退る程の大村大守堀
内雜奥太郎田税戸賀九郎吉屋八郎等が一隊の士卒三百餘名をわけて新井より
あつ来ぬる船十艘許洲崎の港口の果あけり其後又妙真音音曳の單節浦
安牛助と後岡猿八等の士卒三十餘名同船して是も洲崎へ来て其詰朝大阪
下野の士卒四千五百名船七八十艘あつ来りて小森但一郎木曾三从千代丸圖書助
小水門目鏡内葉四郎等と俱に五十子より歸帆のゆえのりまの日又大山道節帶刀と
登桐山八郎二隊の士卒一萬餘名印東小六荒川太郎等と俱に一百餘箇の船の
兼走らせ同港口の歸着せり皆稻村の城の參集ひく屋の上の屋を重るまで
人々多く熱闘の心もあつた然然大江親兵衛へ出て祖母妙真を港口の迎へ姥雪
代四郎の十條力二尺八を携て出て音音曳の單節の夙く這童弟兄を見せまく
欲を約莫這祖孫母子の功とめて恙な再會の老と志と鹿杖のつくも盡

送の長談の短き筆の細寫をくもあつた看官是を查まへて憐れ而其次の日の大坂
大村大守等を首めて武藏相模久く在城せし諸頭人皆義成主の見參して忠
戰軍功を賞せり妙真音音曳の單節の別み又這事あり義成の夫人吾孀
前中も拜見して東西多く賜りける這餘の士卒も威恩命を禀する者多く都て休
暇の命あつて各安堵の思ひを做り是より又五七日を経て大塚信濃下總葛飾
の畠本河の邊の成氏主を送り果て士卒二百餘名を將て稻村の城へあつ来り
てて東西の擾乱餘波を治りて房總平安ありけり良賤士民相賀て置
酒して千歳を唱えり然程に瀧田の義實老候へ義成義通其身を
思ひがけり進の事且八個の大士を受領の款ひの堪を我老候に是を
朝恩武恩を禀奉りながら其兩御使の對面せ居ながら這生緒を食るべし
ゆきとて一日勅使代秋篠廣當と使使熊谷直親を瀧田の城へ請待して

勸不登餐饌の款待大くこのちち八代士等参仕へて其席を預りける。是
 ようの後廣當直親の這地の所要るけども東西の會盟を見果として
 歸洛せんはさきかめて直親の水路より鎌倉及五十子に赴きて其後を專催
 促も廣當の猶稻村の城内に在り。這故の東西の使者往來して會盟の日を
 定むる。唐山戰國の時諸候其國境を出て俱に血を飲りて誓言を做せり。まづれども
 武藏相模と安房上總の海を隔るは會盟の呼み。因て意を相模の三浦と
 安房の洲崎の海上僅に六里の過ぎとせりて天よく晴るる日は相臨る。浦の古
 家も濱の難松も瞭然として好見えざる者多し。然る會盟の日正顯定は三
 浦の濱に出べし。又義成の洲崎の浦に出で向ひ相臨む時東西の使者快船の
 うち集りて且往來して誓言献酬の義を行ふ。然る會盟紛れあつるを
 との熊谷直親豫より秋篠廣當と商量して相定る所は是より東西其

準備の時六月朔の徽雨新霽齊て薄暑炎熱と増折る。六月の日の黃道正
 吉也。且海邊納涼の爲も宜し。けいげを豫て卜定む。其程の扇谷定正
 山内顯定の三浦の濱邊迄の一座數間の假屋を架さず。當日辰牌より朝服を出
 坐せり。這日來會の諸候の千葉の自亂三浦陸奥守義同其子景泰三郎義武
 上杉五郎憲房扇谷五郎九朝良式部少輔朝寧并ひ大石見守憲重其子
 源左衛門尉憲儀齊藤左兵衛佐高實其子兵衛太郎盛實長尾太郎
 為景白石城久重勝巨田新六郎助友小幡木二太郎東震原播磨久等
 是之這餘足利左兵衛督成氏の名代下河邊莊司行包長尾判官景春の名代
 直江莊司兼光來會を成氏に先度不懲り。又景春の獨立の志のれ。各病着
 假托て老黨を以て名代をまの他。服の大刀自女流。且會盟の與らむ。且越
 路遠ければ稲戸津衛由元も辭して來會せざる。この日諸家の從臣士卒に至る

ての枚擧の違ひも。假屋の三面の紫の幔幕の白く竹の群雀の花號漆做
うを掛匣らして猩緋の檀せりて席を其左右の數鎗五十條と架豆して小幡
馬纏の桿棒を執る走卒二百名汀渚の在りて敬衛を其小頭人各麻社社を
叩く結を十手執る者四五名在り前濱の準備の快船二艘を維ぎて其船毎
究竟の舵工八九名を仕り然又安房の洲崎の浦の去歳の初冬造りし
望海の臺のまへ別假家を儲る及び口中黒の花號の幕を張且するの
外物を飾るる。徳而這朝里見左少將義成右衛門佐義通俱の朝衣朝
冠を件の臺の着坐在り両家老八犬士諸兵頭有司近習に至るまで皆礼服の
袖を連ねて相従ふ者數も其姓名の省て具ふせむ快船の準備も自他異
るべしゆも三浦の假家又使熊谷直親の洲崎の臺の勅使代秋
篠廣當の俱の這會盟と檢まるべし。其の日の朝より天々晴れば這里より

ウコ 〇と糸ぢねのり
那里より千里鏡を用ひて頭人寸馬瞭焉。徳而己の左側の三浦の濱
の暗號の烽火を賜へ洲崎の亦烽火をり谷と登時三浦の方より巨
田新六郎助友麻の肩衣長袴を黄金装の大刀を跨る項の誓書を藏め
る細小櫃を掛て船の中英のち無れに従ふ士卒五六名舵工八名櫓八挺櫓拍
子揃へ漕出其次の快船又一艘小幡木子太郎東震の這會盟の誓使めて其礼
服の助友の異も二樽三荷を相載て従ふ士卒八九名も八挺櫓と漕せり有
徳一程の洲崎の浦より漕出き二艘の快船あり其一艘の別人をも誓書の正使
大坂下野亂智の次なる船の誓使政木大全孝嗣兼る各礼服従者贄物
上の寫を相似れ今亦各状をば然れ東西四艘の快船は波上三里の程の
喘々も遭際元自疾と飛鳥の異も助友東震も亂智孝嗣も送の
目礼志ぬるの一鼻間の行過けり約莫船の迅速も唐山の快船との

快く走まわらるべし。國俗の呼云鯨船又今俗の云推送り船の類也。今造四角
 船の迅速なるを思ふべし。間話休題。余程の巨田助友の其船又鯨洲崎の届りて伴
 當を得て浦邊の登るに警固の走卒而三名案内して臺下小造らる。助友則
 袴の括緒を解捨て拵書書と雙のふみ棒げて階を登る。大村大学立迎て引て
 義成主の見あむ。助友先義成主を拜されば義成急み礼を返して其来意を安
 まくも當下助友の東西和睦會盟の一先と演て齋しる。拵書書呈閱を則是
 持資入道道灌の糟屋の館の在りて定正顯定の為め綴る。呼云義成是を大村
 大学に讀まると拵言ハ則五ヶ條の善政を振て農を薦め天子將軍の調貢を
 憚るの如く隣國の父と見奉りて境を犯さる。賞罰を正して賢を求む
 俟に遠き嫡子と廢て庶子と立るとる。妾をて妻を做さるとる。凶年の隣國
 相資て其足らざるを補ひ不忠不孝の行は是れをくむ。其要領を載され義

成則姓名の下の花押を寫して指を刺て血を瀝ぎ是を助友の遺與て且其使節を
 勞ひて大刀一口を授け。巨田助友謝して退る。小幡東震の船既小造りと替物と
 進呈を里見の青侍等是を受合ふる。白酒一樽黒酒一樽塩鴈二折櫃
 生鯛二折櫃乾菓二折櫃是を東震則其目錄を執りて階を登る。時大江親
 兵衛立迎て引て義成主の其名を呈口。東震は目錄を呈閱して東西會盟の
 果る兩管領の款ひを傳達せ義成是を謝して又東震の大刀一口を合せけり。柳
 巨田助友の心術人柄人の知る所。這小幡東震の年尚小けども父東良の風ありて
 忠美廉恥の薄くねば。信る時の阿谷と後と扇谷の内人。只這俊傑二名
 ありて先度の恥を雪とせんと人皆是を答ふけり。然る這時大阪亂智政木孝嗣が
 三浦の假家へ造りて定正顯定の會盟の誓書書呈閱をねる。替物の二樽三折を
 進呈せり。前の寫去と趣と然るる差別りければ備せむ。其誓書書大村大学が

八代傳記卷之四十一



理義を詳み
 して高嗣
 と高嗣
 故主辨ふ

終る所は是も又五人條の自他示合さねども道理を知る者の深まる文へ宛
 符節と合せたる如く好相似とて人一奇と定正是と白石重勝の讀ませ頭定并
 來會の諸候と俱に听けり所果て又定正頭定より下長尾景春の名代直江兼
 亮に至るまで連賜姓名の下各花押を寫して又各各指と刺血を添けて定正會で
 胤智の遞與まを受載させ得と見て謝し懐のて罷出る時定正則大刀一口牽
 出物とも次政木孝嗣入り替り假家の登り來て又君命を演て贄物の目錄を呈
 させ定正羞て答る所を知らざり頭定代り謝して亦大刀一口を合はせけり這時
 大阪下野の既の伴の士卒をば船に乗りて去りぬ孝嗣も推續きて船に乗り
 まくま程の定正の犬石憲儀をりて急は是を起ちりて且のいさるやう前め
 我行て罪なき汝を死地に置り其冤枉の分明あるより往る日朝良朝憲が
 稻村より來て詳の告ぐ只後悔の外ありぬ汝倘三世の恩を忘る

忠孝の心今も程らむ立ち來て我の仕へよ然に舊領の十倍してヨク
 美録を食せま欲も這美誰何と挑りけり孝嗣是をうちて詞徐に答る
 やう御説養りのひぬ臣等も又是人之其根を忘るて杪の憑んや去るは
 臣が君を棄つるのあつむ君が臣を殺せるは夫覆水の盆の復らざり吐言の駟も
 及ぶべからざるの折靈狐の眞助も今いふと君の見参せん廷扇を儀我
 為の謝せよ君が悪をせぬは河鯉佐太郎の既の死りぬ今義の便り恩の
 縁る里見の忠臣政木大金が榮利の為の哄誘さきて不義の奴のあつむべもいひ
 暇禀をと高も強袖を拂ひつ伴當をのり立て又快船の無を洲崎へ
 還りける憲儀の興醒て只得孝嗣の答をよ返命をてけり定正听て眼を
 睜り口を鉗る鼻息の又のりも然る日東西の使者の快船水路
 六里を往還志ぬる程洲崎の臺に當り洲崎明神の神人等舞樂を奏も

大塚信濃大山道節俱の扇子を開きて立て舞ふふよ曲節の稱ひり人咸
驚き見て何と日本の学びのやと感ぜざる者ありけり然る又三浦の濱
假家由鎌倉より招きよせる能樂人等祝言の能樂を誦頌も其次鼓の音
送の浦風小勾引きて最も幽小ゆえけり既にして助友東震へ抵言書を捧て三浦の
より來り又胤智孝嗣へ連署の抵言書と定正頭定の謝書と受合りて洲崎の
臺より來て俱の友命を致し程の夕陽西の斜に登時義成義通へ八大を
臺を下りて俱は波濤盡處の立程不定正頭定も來會の大小をばて俱は濱邊
立出て東西一霎時眺望て各揖讓して退散是れ會盟果のけり今程の武
藏相模安房上總の漁戸等々の次の日より江海の境を論せど自他うち交り
細さ下る俱は海幸ヨリよりけりいよ生活の便着をいよ又武藏下總の
境より兩國河及墨田河の浮橋を架渡して良賤往還の便とをいよ

俊の

國の士民相親も胡越も肝胆の作りけり按ざる夫木集の康正の年間墨
田河の浮橋架を詠る歌あり其歌まゝ二河ひりいよ今をいよ身は橋の
わつせりけり康正より文明まで遠くも看官作者の用意を知るべし本傳
前板の像賚り墨田河まゝついで渡りやまらぬ世とうに橋の昔ありけりと
詠り右の歌を取まるに畢竟扇谷山内の両官領里見氏と和睦會盟と
後の話説甚麼ぞや開へ又下回の解分るを聴ねり
作者云前のもろ如く本輯百七十七回以下前板發兌の時尚腹稿のまゝりて看
官の夙々結局まの趣を知らせなく其題目を總目錄中の附載を今編次の及びて豫
思ひよりいと長くするものなり其題目を増改しよまがめて一回を上下の分ち或は三折して上中
下三卷の者是れ是故の四十六の卷端の附録目と出し宜く是と併見るべし
南總里見八大傳第九輯卷之四十九終

零六卷
六卷
六卷

本傳刊行の書肆文溪堂責言ま今板結局編第百七十七回以下の題
目へ前板の出さしより文更く多しせし附録目數面を新の題し全部一百
零六卷回外刺筆ま七一九十一面を結局大團圓の成べりし作公刊の自
注の見えたる如く余るの這大部の書の總目錄ま四方の君子披閱の時毎
搜索の便りありしべし且遺忘の備るの足ざりしべし今番又公刊の首卷
一卷を刊附し首卷へ所云總序全部總目錄八犬士畧傳姓氏目錄等是
這卷ありしに則看官時の臨みて某の事へ某の卷某の回ありしと
知るの速しして利便是より捷なり況全傳中の善惡賢不肖の人物
其姓名を漏さず悉皆記憶せしむるを余るを姓氏目錄に据時へ
搜索の暇を費さざりて當の當と指が如く多しべし言の半頁の餘紙
ありしと賜顧億兆の君子に這故由を告奉るるにん
ヒイキ

右八犬傳第九輯五十二の卷の下まで今度出版全部の相成の依之
四十七の卷と致分巻都合十卷の所彫刻出来の五冊四十九巻と丑冬
より賣出し置五十の巻より下五冊も推續に當寅春中無遅滞出版仕
ゆる猶追々小紙采成出版せしむ俱前書小記の首卷總目錄一卷
差加えし五冊の都合不宣の異日別彫刻を身入出版の右十
冊兩度不賣出しゆるは後出版を後仕ゆ
敬白

天保十三年壬寅春正月吉日

大阪心齋橋筋博労町

河内屋茂兵衛

江戸小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛板

八犬傳九輯卷四十九

二十七

